

「Medical Disasters」とは一致していないが、この本を読んでみると原題をそのまま和訳としなかつた訳者の意向と苦労がよくわかり、この本にふさわしい日本語題名がつけられたものと感心した。

この本の訳者は二人共耳鼻科の医師であり、あとがきの中で「この本は malpractice をあげつらつたものではなく、大部分は近代医学の発達の過程で起こつた悲惨でときにおろかな笑えぬエピソードを中心としたものである」と述べている。本書の著者は皮肉、ユーモアのセンスのみならず大変な博學で、記述の内容に関連して聖書、古典などが縦横無尽に引用され、その内容はときに読む側の知識不足が気になる程のものである。この本を訳すにあつて大変な苦労があつたと想像できるが、訳者は読者の立場を十分に考慮して、原著にはない写真や挿絵をいれ、また注釈を各所に加えてくれたため、全体が大変読みやすいものに仕上がっている。

ユーモアと皮肉と示唆にあふれた表現で、医学のきわめて重要な一面を歴史的にふりかえつた本書が、臨床家は勿論これから科学を追求しようとする若い多くの医師達にも読まれることを願うものである。

〔時空出版、東京都文京区小石川四一八—三、電話〇三—三三八
二—五三—三、一九九一年、三〇〇頁、定価 二〇〇〇円〕

（山本 修三）

杉立義一著『京の医史跡探訪 増補版』

杉立義一氏はこのたび『京の医史跡探訪』の増補版を思文閣より発刊された。初版本が発行されてより六年になる。著者は精細丹念な探訪の跡を、写真図解入りで達意の文章を以て詳述され、かつてないユニークな、親しみと温かさのこもつた実録書として好評を博した。歴史物の単行本が数年にして版を重ねるといふことは珍らしいことである。今回は、初版本の百項目に新たに二十六項が増補され、目新しく内容がいかに豊富となつている。

著者は昨年京都における日本医学会総会の医学史展示に当り、「医学の転換史を訪ねて」を担当し、また第92回日本医学学会総会々々長として会長講演を行い、永年に亘る研究を集成して『医心方の伝来』を公刊された。それらの功績により、昨年度日本医師会最高優功賞をめでたく受賞された。

本書の巻頭に図示されているように、京を洛中と洛外に分ち、更に各々を四区分し、総数一〇〇項の医跡が紹介され、新たに巻末に増補した二六項の史跡が追加された。

筆者が今まで訪問した京都の医史跡を追想し、筆者に関わりをもつことのみで申し訳ないことであるが、番号順に紹介しながら追記し、本書の推薦をさせて頂くこととした。

○

(2) 嵯峨釈迦堂、清涼寺

齋然が宋に渡り、釈迦立像と共に持ち帰ったと伝えられている、湯島聖堂の恩賜神農像が、当時の納入帳に記録されているかを、昭和五十九年八月清涼寺を訪れ、調査して頂いたが見当らなかつた。その後中国よりの希望で、神農像の詳しい写真を撮影の際、背面の扉の裏に製作の由来、作者の名が記録されているのを見て驚いた。実に、寛政十七年、將軍家光の発願で、明石清左工門が製作とまで記されていた。

(3) 仁和寺の古医書

『医心方』『黄帝内経太素』外が挙げられている。筆者の弟有道は、かねて「太素に傾倒し、昭和十七年十月六日より五日間仁和寺の宿坊に泊って太素経の調査に没頭し、『漢方と漢薬』第十巻五号に「国宝仁和寺蔵本『黄帝内経太素』に関する研究」の論文を発表した。そして『太素』の和訳本発行を企画したが戦争のため中止となった。間もなく弟は応召し、中支で司令部より、各部隊の漢方教育係の命を受け、「桂林」にて偶然にも小曾戸丈夫薬劑官と邂逅講義の中で、『太素経』についても語ったという。

小曾戸丈夫氏の『意訳黄帝内経太素』（築地書館、昭和六十年刊）の序文に、そのときのいきさつの記録がある。奇しき因縁というべきである。

(4) 鳥辺山に眠る三医人

この中の一人和田東郭の墓の入口に「忠誠の名医和田東郭先生墓所入口」という石標がある。昭和三十八年、日本東洋医学会有志が、無縁となった東郭の墓を整備修復し、現在も

供花料が送られていると花屋さんが語った、と本書に記されている。このことに追記してみると、昭和三十八年、『漢方の臨床』第十巻九十号に、細野史郎氏が、「日本の漢方を築いた人々」の一環として、「和田東郭の漢方医学観」と題する大論文を発表した。これを機会に細野氏は、大塚敬節、寺師陸濟両氏と共に追悼座談会を催し、墓の修理、供養を行い、その後聖光園が永代供養料を納めたとのことである。

(43) 万病一毒説・吉益東洞

東福寺、莊嚴院の吉益家の墓地にはたびたび参詣した。筆者の吉益家一族の家系図、最終的発表は、『漢方研究』一九九二年一月号で、『京都の医学史』に掲載されている図表の誤りを訂正した。また吉益家門人録は『漢方の臨床』第三十五巻八号に掲載したが、この但州のところに、著者杉立家一族の名が列挙されている。

(49) 医界の天下者・曲直瀬道三

京都の医史跡のうち、筆者が最も屢々足を運んだのは十念寺、曲直瀬道三の墓である。本書に「近年にいたり、東京の今大路家と京都の曲直瀬家との間で、墓地の本家争いが起きた」とあるが、近年は明治の中頃と改め、京都の曲直瀬家の「京都」は筆者の誤りで、抹消して頂きたい。

増補の部(4)に初代曲直瀬道三顕彰碑のことが紹介されている。この建碑については、全く杉立氏のお骨折のお蔭で完成、心より感謝申し上げる次第である。

(86) 二十六聖人発祥の地

写真の標石に「妙満寺跡」の四字が刻まれているが、顕本法華宗總本山妙満寺は現在左京区岩倉幡枝町にあり、尾州藩医宗浅井家の医祖三代、延斎、草春、周伯の墓があったが無縁となっていた。国幹顕彰会が昭和五十二年に新しく墓地を造設した。本書の三版出版のときは浅井家三代の墓を追補して頂きたいものである。その由来については、『漢方の臨床』第三十九卷一号「温知荘雑筆」に詳記した。

増補(26) 反骨の人・太田典礼

本書の中、只一人現代の人である。墓標に生前自筆の「本来靈魂なし墓は歴史の証」とのみ刻まれている。昭和四十七年二月、太田氏が理事長の(財)日本古医学資料センター創立のとき、小川鼎三、大島蘭三郎、緒方富雄各氏と共に大塚敬節氏と筆者も理事に就任し、度々理事会に出席し、昭和四十八年十一月、安政版『医心方』の復刻と和訓解説書出版に協力したことがある。まさに話題に富む反骨の人であった。

(矢数 道明)

(思文閣、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五―七五一
一七八一、平成三年十二月、A5判・三七八頁、定価三〇九〇円)

君塚美恵子編『紀州藩医 泰淵の日記』

躍動的でリアルな史料群に出会いたい、という想いは研究者全ての願ひではなからうか。私のように特別な史料群を持

たずに研究を行っていると、時々一抹の寂しさと物足りなさを感じ、そんな想いに陥る。今回紹介する『紀州藩医 泰淵の日記』は、そんな想いを晴らしてくれた一書であった。

本書は、日記の著者泰淵の経歴や家系もはっきりしているので、必要以上の予備調査もしなくて済み、直接研究テーマに取り組む事ができる。そんな点からも素晴らしい史料である。ではまず、筆者「泰淵」について整理しておこう。

筆者―中村泰淵真貫(寛政九、一七九七―安政六、一八五九。六十三歳)。

系譜―町医師山口流謙秀安二男。養子(天保二、一八三一、三十五歳)。中村家四代目・本道内科。

役職の経歴―紀州藩江戸詰め医師。小普請医師(天保二、一八三一)、奥医師(天保十、一八三九)、地廻りお供(御匙医同様、弘化元、一八四四)、御匙医格(嘉永四、一八五二)。

趣味―和歌・漢詩

在職中の藩主―十代治宝・十一代斉順・十二代斉疆・十三代慶福(幼名菊千代、のち十四代将軍家茂)の四代。

江戸の屋敷―柴田玄岱方、四ツ谷仲町
本書は次の三つの部分から構成されている。

①日記：江戸から和歌山への道中日記・和歌山での勤務日記・日光参詣予参の随行日記。これは天保十一年(一八四〇)三月二十九日から同十四年(一八三三)四月二十三日までの四年間、四六二日分の日記である。

②関係文書編：辞令・薬の注文書・手紙等八点の影印。